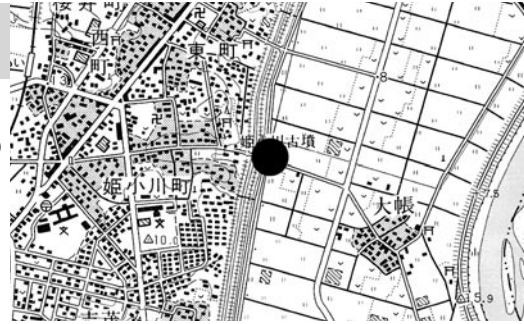


## ひめした 姫下遺跡

所在地 安城市姫小川町  
 (北緯 34 度 54 分 52 秒 東経 137 度 5 分 49 秒)  
 調査理由 中小河川改良事業 (鹿乗川)  
 調査期間 平成 18 年 10 月～平成 19 年 3 月  
 調査面積 3950 m<sup>2</sup>  
 担当者 宮腰健司・永井邦仁



調査地点 (1/2.5万「安城・西尾」)

**調査の経過** 発掘調査は、愛知県建設部河川課による鹿乗川河川改良工事に伴う事前調査として、愛知県教育委員会を通じた委託事業である。平成 17 年度 (調査面積 3470 m<sup>2</sup>) から引き続き 2 年目の調査である。昨年度は姫下橋の両脇に調査区を設定したが、今年度はさらにそれぞれの南側と北側に調査区を設定した。すなわち 05A 区の北側に 06A・B 区、05B 区の南側に 06C 区である。

**立地と環境** 姫下遺跡は現鹿乗川東岸の沖積地 (標高 7m) に広がる弥生時代中期から江戸時代までの複合遺跡である。遺跡西方には碧海台地縁辺がせまり、それとの高低差は約 4m である。台地縁辺には前方後円墳である姫小川古墳 (全長 69m) をはじめとする古墳群がある。また東方約 250m の微高地には内行花文鏡の出土した八ツ塚古墳があった (滅失)。

**調査の概要** 調査の結果、06A・B 区では平安時代中・後期から鎌倉時代前半の遺構・遺物を中心に、06C 区では河川跡と古墳時代前期から中期前半を中心とする土器の集積を確認した。

**06A 区** 06A 区では、灰釉陶器から山茶碗が出土した。灰釉陶器は東山 72 号窯式期以降が主体である。また若干ではあるが三河型土師器甕や中世伊勢型鍋も出土した。これらの時期幅は 10 世紀後半～12 世紀代である。しかしながらその数量は調査面積に比べわずかである。

遺構は、古墳時代から平安時代中期までの堆積層と考えられる黒褐色シルト層の上面において検出できた。遺構は平面形が 3～5m 規模の方形で平らな底面をなすものが多数検出された。覆土は褐灰色シルトを主体とする。それ以外には同様の覆土の溝が確認できた。遺構群のうち前者についてはその形状から竪穴建物跡の可能性が高いと判断した。ただし柱穴や炉跡などの施設はなく遺物も少ない。

次に地山となる砂層上面にて検出された遺構がある。調査区北辺にて断面形状が一定でない幅 30～60cm の小溝や土坑が検出された。遺構は黒褐色シルト層に完全に覆われており、同層形成以前のものであることが考えられる。出土遺物は少ないが古墳時代前期をさかのぼるものと考えられる。ただ調査区北辺以外では顕著な遺構はなく、北に隣接する亀塚遺跡の弥生時代を中心とする遺構に関連するものと推測される。

**06B 区** 06B 区も 06A 区と同様に灰釉陶器主体の出土遺物があった。しかしこちらでは 9 世紀前半の須恵器の他、古墳時代前期の土師器が調査区南半部で出土した。このことから 05A・B 区から続く古墳時代集落の北限がこの辺りになることが推測される。

遺構は 06A 区で検出されたものと同じ竪穴建物跡の他、黒褐色土層を深く掘り込まれた竪穴建物跡も確認された。後者の建物跡では周溝や柱穴が確認された事例もあり、これらは 06A 区の竪穴建物より時期がさかのぼるものと考えられるが、出土遺物は少なく時期判定が難しい。竪穴建物跡以外ではおおむね北東から南西方向に不規則な屈曲をも

つ幅約 40cm の小溝が数条確認されたが、これらは竪穴建物跡に先行する。また、地山砂層上面で検出された袋状土坑の底部からは条痕文系土器が出土しており、ここでも古墳時代前期をさかのぼる遺構が散在することが確認された。

## 06C 区

06C 区では、05B 区で検出された北東 - 南西方向の河川跡が、調査区の北西 1/2 程で確認された。この河川跡は昨年度の成果で得られたように、古墳時代前期から中期にかけて埋没しており、古代から中世には河川の深い部分が窪地状を呈していたようである。今年度の調査では新たに、河川の中央部に向かって緩やかに傾斜する幅約 12 m の段状の地形が確認された。この段状の地形は調査区北西隅で急激に深くなり、この深い部分において鋤・曲柄などの製品を含む多くの加工材や木材、杭列が出土している。また河川肩部分では河川北岸と同様、廻間 III 式から松河戸 I 式期の土器の多量廃棄が見られ、北端で人面文土器片が出土している。河川肩部の南端では廻間 III 式のまとまった土器が廃棄された土坑や、断面が漏斗状を呈する古墳時代前期の井戸が検出されている。

河川跡の浅い段状地形部分では竪穴建物跡が検出された。これらの建物跡は河川上部の平安時代の堆積を掘り込んで作られており、平安時代後期から鎌倉時代のもと考えられる。建物は調査区南東部の微高地部分にも存在した可能性があるが、後世に削平されているようで、該期の遺構は若干の土坑のみであった。またこれ以外にも微高地部分では江戸時代後期の溝・大型土坑が検出されている。

## まとめ

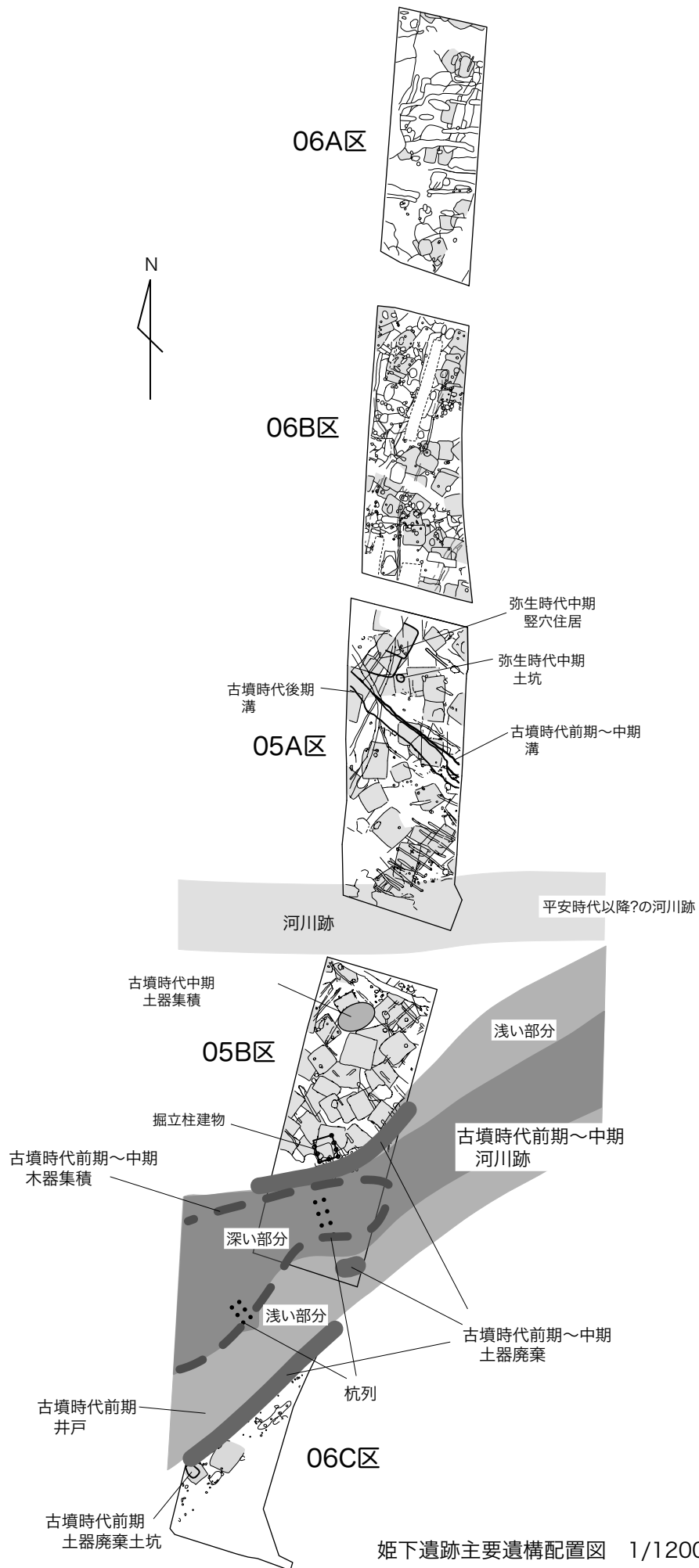
06A・B 区で確認された平安時代の竪穴建物とみられる遺構群は、05A 区で確認された 10 世紀前半の竪穴建物跡に継続する平安時代中～後期の集落遺構と考えられる。西三河地域では当該期の集落があまり知られておらず、建物構造も含めて今後の検討課題である。また、遺跡南部の河川跡付近では奈良時代後期から平安時代前期の須恵器・灰釉陶器もみられ、遺跡北部の出土傾向とは異なる。このことから平安時代を通じて遺跡南部から北部へと集落域が拡大したことが推測できよう。そして 13 世紀代には居住地としての土地利用がなされなくなったと考えられる。

06C 区では、古墳時代前期から中期にかけての河川跡の南岸の様相が明らかになった。特に浅い段状の地形から肩部にある井戸や、祭祀を思わせる一括廃棄がなされた土坑は、この地点の土地利用の一端が窺われる事例と考えられる。また河川肩部への多量の土器廃棄は、北岸と同様廻間 III 式から松河戸 I 式にかけて継続的に行われており、南側にも該期の集落が存在することが想定された。遺物では、鹿乗川流域付近に集中する人面文土器が出土したことが特筆できる。さらに新たに平安時代後期から鎌倉時代の集落域がこの地点まで広がっていることも確認された。

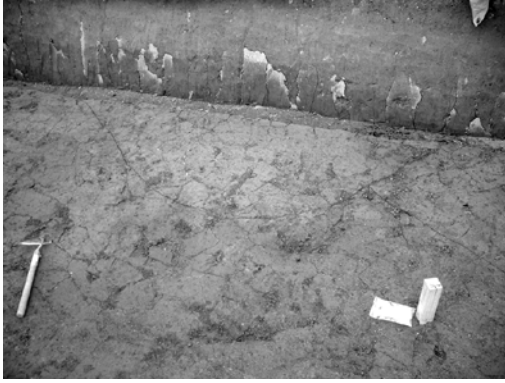
(宮腰健司・永井邦仁)



06C 区出土人面文土器



姫下遺跡主要遺構配置図 1/1200



06A 区竪穴建物跡検出状況



06A 区竪穴建物跡



06B 区竪穴建物跡調査風景



06B 区南部全景



06C 区全景



06C 区河川跡南岸土器出土状態



06C 区河川跡木器出土状態



06C 区土器廃棄土坑